

中病だより

創刊号 島根県立中央病院



県立中央病院の使命

病院長 中川 正久



県立中央病院の歴史は、昭和15年、故田部長右衛門氏(元島根県知事)が全額私財を投げ打って建設された松乃舎病院に始まります。その後、昭和23年に県に移管され、以来、58年の歳月が経過しました。

この間、中央病院は、設立者である県知事の命を受け、時代とともに変遷する地域の医療ニーズに応えるべく努力してまいりました。今後も、中央病院は、与えられた使命を全うするために全力を尽くす考えであります。皆様方のご支援、ご指導をお願い申し上げます。

中央病院の使命は、多々ありますが、最も重要なものとしては、「高度・特殊医療」や「救命救命医療」などの政策医療の実施と、離島・過疎地へ医師の派遣などの「地域医療への支援」があります。

「高度・特殊医療、救命救命医療などの政策医療」としては、全県を対象とした救

命救急センターの機能や総合周産期母子医療センターの機能、地域がん診療拠点病院の機能などを担っております。これらの機能は本県の医療ニーズそのものでもあり、今後一層の充実を図っていかねばならないと考えております。

「地域医療支援」につきましては、従来から自治医科大卒業生の研修機関の役割を果たしてきました。近年、益々深刻化する医師不足への対応は、県政の重要課題でもあり、中央病院としても最大限の努力を傾注しているところです。

こうした使命を全うし、更に充実した医療を提供していくためには、県民各位のご理解とご支援が必要不可欠であります。そこで、中央病院の現実や諸課題、とりわけ前述の如き「中央病院の使命」への対応策などをとりまとめ、機関紙として発刊することといたしました。

広告規制やマンパワーの制約などにより、不十分な点は多々ありますが、この小紙を是非ご一読賜り、中央病院について皆様方にご議論をいただき、更には、ご提言、ご意見、改善要望などを頂戴したいと思います。皆様方の建設的なご意見を踏まえ、県民の御付託に一層応える中央病院となるよう、職員一丸となって努力して参る所存であります。

各位の御協力を宜しくお願い申し上げます。

「中央病院に期待する」

健康福祉部長 正林 督章



地域医療支援について

今島根県政が抱える最優先の課題は医療従事者、とりわけ医師の確保である。

臨床研修必修化や大学の独立法人化の影響を受けて離島や中山間地の医療機関において、医師の不足が叫ばれ、県行政に対する期待は高まるばかりである。このような中、県立中央病院の果たす役割は極めて大きい。現在も隠岐に産婦人科医や看護師を派遣するとともに、県内各地の医療機関に自治医大卒医や代診医の派遣を行っているが、今後もその必要性は、益々高まっていくだろう。地域医療支援は県立中央病院が県立病院としての存在意義を示す最大の課題と行っても過言ではなく、今後の活躍に大いに期待したい。

がんについて

先日、がんの患者さんやその家族の方々が私のところに來られて様々な意見交換を行った。その中でがんの患者さんの仲間の多くが県外で治療を受けているとの意見があった。かねてより親しくしていた「全国がんと共に生きる会」の会長であった佐藤均さんからは、がん診療の地域格差是正、とりわけ、島根のがん患者さんが県内で世界的なレベルの治療が受けられるようにして欲しいという要望をされていたが、この度改めて何とかしなければ、という思いを強くした。自分がかつて厚生労働省の生活習慣病対策室にいた時に国のがん対策を担当し、地域がん診療拠点病院制度の創設に関わった。昨年、晴れて県立中央病院も厚生労働大臣より指定を受けたが、地域がん診療拠点病院の趣旨は、2次医療圏に1箇所を目途に指定し、5年生存率などががんの診療情報を収集し、地域の住民に提供するとともに地域の医療機関に対し、研修を行い、その地域のがん診療レベルの向上を図るというものである。また、国立がんセンターを中心に全国の拠点病院でネットワークを構築し、共同研究や診療情報の交換、

研修を通して、全国の拠点病院のレベルアップを図り、がん診療の均てん化を図るというのも隠れた目的でもあった。島根県は全国一の高齢化県でもあり、死因のトップはがんである。がんの粗死亡率は全国2位であり、がん対策は健康福祉部としては、真剣に取り組まざるを得ない。

先般、国立がんセンターに2名の医師が研修に行かれたが、県中のがん診療レベルの向上に繋がるのであれば、国内外の著名な医療機関に行き多めに研修に励んでいただきたい。県内のがん患者さんが県外に行かなくていいように世界レベルのがんの治療を提供できるような病院に県立中央病院にはなって欲しい。また、現在県中では、一部の診療科で5年生存率を公表しているとのことであるが、がんの患者さん達からは、全てのがんの生存率を知りたいとの要望であった。院内がん登録を進め、全てのがんについて、生存率を一刻も早く公表して欲しい。

周産期医療について

この1月に晴れて中病は総合周産期母子医療センターに指定された。かつて自分が臨床研修医だった頃、ローテート研修として内科、外科、小児科、産婦人科、麻酔科、救命救急、精神科を回ったが、中でも未熟児医療が肉体的にも精神的にも最もきつかった。いったん500gの未熟児などを担当してしまうと生後3日間は病態が時時刻刻変化するため片時も目が離せず、一睡もできなかったからである。また、産婦人科を回った時、3ヶ月で70件の子を取り上げたが、この3ヶ月間の1日平均睡眠時間は2時間だった。当時は若かったのだからうじて耐えることが出来たが、こんなことをやっていたら周産期を志す医師がいなくなるのでは、と危機感を募らせた。周産期医療

はある程度集約化し、医師の数も一定数以上の体制にし、医師のQOLを保ちながら診療を続ける必要がある、というのが自分なりに出した周産期医療を維持発展させるための結論にであった。平成4年に厚生省の母子衛生課配属になり、第一期のエンゼルプランの策定作業を担当させてもらったが、その際、周産期医療の集約化という趣旨をこめて総合周産期母子医療センター構想を思いついた。エンゼルプランの中では、母子保健分野の最大の目玉であったし、予算も潤沢につき、診療報酬上の評価もなされた。中病の指定に当たっては、途中、助産師や医師が定数に満たないためストップをかけ、中病の関係者をやきもきさせたかもしれないが、制度創設者としてのこだわりがあったのでご容赦願いたい。この度ようやく指定されたので今後はその名に恥じないよう、県内最高の周産期医療を提供していただきたい。

この他、電子カルテや救命救急、病院経営など申し述べたいことは山ほどあるが、制限字数 900 字を勇に超えてしまっているのでこの辺で筆を置く。今後とも県民の期待に応え、高度でかつ良質な医療を安定した経営基盤の下、提供していただきたい。

総合周産期母子医療センターの指定

県立中央病院は、平成 18 年 1 月 1 日に県から「総合周産期母子医療センター」の指定を受け、島根県の周産期拠点病院として稼働することとなりました。

新生児集中治療管理室（NICU）（6 床）及び母体・胎児集中治療管理室（MFICU）（3 床）を整備し、母体・胎児の集中管理や新生児搬送の受け入れまで集中管理できる体制を整えました。

当院は、総合周産期母子医療センターと

して、母体・胎児集中治療及び新生児集中治療を行うとともに、島根県周産期医療ネットワークの拠点として、最新の周産期医療情報の収集・提供や県内の周産期医療従事者を対象とした研修会を開催するなど、周産期医療のレベルアップに努めていきます。

母体・胎児集中治療管理室（MFICU）

母体・胎児集中治療管理室（MFICU）においては、合併症妊娠、異常妊娠、胎児異常等母体又は児におけるリスクの高い妊婦と認められる妊産婦及び産褥婦に対し、常時十分な監視のもとに適時適切な治療・看護を行います。



<人員体制>

・医師

24 時間体制（当直体制）で、産科を担当する医師 1 名を配置しています。（別にオンコールにより対応できる医師を 1 名配置）

・看護師・助産師

常時 3 床に 1 名の助産師又は看護師を配置しています。

・その他

緊急帝王切開の場合は、30 分以内に児の娩出が可能となるように医師、看護師等を配置しています。

新生児集中治療管理室（NICU）

新生児集中治療管理室は、早産児、低出生体重児、新生児仮死、感染症、急性・慢性呼吸器障害、重度な意識障害及びけいれん、重度な黄疸、急性心不全、重篤な代謝障害、高度の先天奇形で重篤な状態にある新生児に対して、常時十分な管理のもとに内科的治療及び外科的治療を含めた高度な治療を行います。



< 人員体制 >

・医師

24 時間体制（当直体制）で、常時新生児を担当する医師を配置しています。

・看護師

常時 3 床に 1 名の看護師を配置しています。

認定看護師資格を取得して

ホスピスケア認定看護師

胸部総合病棟 小松 歩美

認定看護師制度は、特定の看護分野にお

いて熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護現場における看護ケアの広がりと質の向上を図ることを目的としています。現在、日本看護協会が特定している認定看護分野は 17 分野あり、5 年毎に更新する必要があります。また、近年、認定看護師による活動は、診療報酬の加算要件の中で「所定の専門分野の研修修了者」として必須条件となりつつあります。

島根県立中央病院にはホスピスケア認定看護師 1 名と、感染管理分野と WOC（創傷・ストミ・失禁看護）分野で養成研修を終えた看護師、がん化学療法分野と新生児集中治療分野で研修中の看護師、平成 18 年度から重症集中分野で研修参加予定の看護師が各 1 名ずついます。

私はホスピスケア認定看護師として 2005 年 8 月に認定を受けました。現在、胸部総合病棟に所属しながら緩和ケアチームを立ち上げて活動を始め、平成 17 年 11 月からは症状緩和を目的に緩和ケアチーム回診を試行的に腹部総合病棟で開始しました。医師、薬剤師、担当看護師とともに週 1 回 2~3 時間程度、1 回につき 5~6 名の患者さんに回診を行っており、平成 18 年度からは全病棟を対象に活動を拡大する予定にしています。約 4 ヶ月間回診を行ってきましたが、その間に見えてきた問題点はこれから活動を重ねながら改善していきたいと思っています。他の活動としては院内・院外の勉強会等の講師、島根県看護協会の緩和ケアアドバイザー養成研修のプログラム検討委員、保健所での急性期口腔機能向上検討委員などを行っています。また新たな情報を得るためや他施設との交流を図るために、学会や研修会にも参加しています。これから

さらに活動を推進し、患者さんやご家族の苦痛が少しでも緩和でき、その人らしく過ごされるように援助を行っていききたいと思います。

がん性疼痛、呼吸器症状、消化器症状、全身倦怠感、口腔ケア、精神症状、家族ケアなど患者さんやご家族に対するケアに関してお困りのことなどありましたら、一緒に考えさせていただきたいと思いますので気軽に声をかけてください。



初期臨床研修医奮闘記

1年次生 川上 潮

県立中央病院では1年間で、内科、外科系、救急・麻酔科をローテーションします。



1年目の救急外来宿日直は、軽症から重症までさまざまな疾患を経験できますが、とても緊張し戸惑うことだらけです。しかし上級医師に相談しながら、初歩的な診察の仕方から、手技・診断へのアプローチの方法を色々な科の先生から教えて頂きます。病棟では主に、診断方法、検査手技、専門的治療、術前後管理、画像診断等を学びます。もちろん、看護師さんや患者さんとのコミュニケーションから学ぶことは本当に多く、人生勉強にもなりました。またコメディカルの方や出入りの業者さんからも様々なことを教えていただき、その専門性の高さに驚くと同時に自分の未熟さを痛感します。しかし、様々な方のお世話になって一人前になっていくんだなあ（なくてはいけないんだな）と思います。



当病院の特徴の一つに

完全電子カルテシステムがあり、過去カルテや処方・検査等の情報を迅速に得ることができま



す。慣れるまでは多少時間がかかり、未だに知らない機能もたくさんありますが、知れば知るほどその便利さを実感できます。

先生方の御配慮もあり、かなり恵まれた環境の中で研修することができますが、新研修制度は始まったばかりで、様々な矛盾や問題も生じるとかもしれません。しかし私たち研修医の努力・工夫で充実した2年間にしなくてはと思います。最近になって思うのはこの環境を生かすもダメにするのも自分次第だということです。

人間関係も濃厚で、緊張する場面も多く、ストレスの多い仕事かもしませんが全職員の方々に教えられ、時には患者さんに助けられ、そして同期の研修医に支えられながら日々仕事をしています。

来年は私たちが新しい研修医をサポートしつつ、充実した研修医生活を共に過ごしていきたいと思います。

野球部優勝への軌跡(奇跡?)

野球部主将 山中 英樹

今回我が野球部は、「第32回島根県病院対抗親睦野球大会」において優勝いたしました。ここで、当野球部の活動と今大会の軌跡を簡単ではありますが、ご報告させていただきます。

当院の野球部は、当院職員または委託業者および当院への在籍歴がある者が、野球を通じて人間的交流を行うことを目的に活動しております。

活動内容としては、主な大会として、病院対抗親睦野球大会・自治体組合野球大



会・スポーツ店主催野球大会・出雲合同庁舎リーグ戦等があり、各大会の合間に練習試合等の活動を行っております。

今回優勝いたしました病院対抗野球大会とは、県内の各施設（登録施設14）にて参加可能な施設が交代制で主催者となり、野球を通じて交流を深める大会として、昭和48年より開催されています。当部もこの大会を年間の最大行事として、毎年優勝を目標に望んでいます。また本年は当院が主催者病院という事もあり、意気込みを強く持ち大会に望みました。

近年は、野球人気の低迷もあり、部存続の困難な施設が多く、本年の参加チームは8チームでした。



～大会の経過～

緒戦 準々決勝となる対松江生協病院戦。

主戦曾田の好投と、相手のミスに乗じた加点により、10-0でコールドにて快勝致しました。先発の曾田は自身初完封でした。

続く準決勝は初出場のこなんホスピタル戦。

相手戦力が未知数の中、白熱の貧打線でした。リードしたものの終盤同点に追いつかれ、迎えた最終回。代打山中の劇的サヨナラヒットにて4-3にて辛くも勝利しました。

そして決勝戦。

相手は昨年優勝の西川病院（浜田市）。当院先発山下、相手主戦の好投により息詰まる投手戦を展開。中盤相手に先制されるも、終盤過去最大級の集中打を見せ一気に加点し、大逆転！終わ



ってみれば8-3。

見事に11年ぶりの優勝を手中に納めました。（本当に奇跡的！）本大会は、トリプルヘッダー（3試合/日）という過酷な日程を少ないメンバーのなか気力でカバーし、主催者病院である事で、「簡単には負けれない！」という意地で勝ち取った優勝だったと思います。

選手の皆さん本当にお疲れ様でした。そしてありがとう！



また主催者病院として本大会を運営していただいた、総務グループの皆さんにも深く感謝し、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

野球部では、現在も部員を随時募集しております。経験の有無は関係ありませんので、野球好きの方は是非お越し下さい。以上簡単ではございますが、優勝報告を終わらせていただきます。

編集後記◆○○○○◆○○○○◆○○○○◆○○○○◆

広報委員会を中心にこのたび「中病だより」をようやく創刊することができました。皆様方からの御意見をいただきながら、さらに分かりやすく内容を充実して参りますので、よろしくお願ひします。皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。(YY)

やっと発刊することができました。寄稿をいただいた皆様に感謝します。「このくらいのこと、朝飯前」と思っていたが、時間が刻々と過ぎてしまい、年度末ギリギリになりました。この小紙が大きく育ち、皆様に注目してもらえるようになって欲しいと思います。題字は、岩成先生に揮毫していただきました。題字のとおり、たくましく育って欲しいものです。(SY)

◆○○○○◆○○○○◆○○○○◆○○○○◆

島根県立中央病院 広報委員会 2006. march
e-mail : spch@spch.izumo.shimane.jp